



TITLE:

ブルキナファソ農村地域における 女性住民組織によるマイクロファ イナンス運営

AUTHOR(S):

神代, ちひろ

CITATION:

神代, ちひろ. ブルキナファソ農村地域における女性住民組織によるマ
イクロファイナンス運営. ZAIRAI CHI 2013, 1: 35-44

ISSUE DATE:

2013-03-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/251181>

RIGHT:

© Zairaichi Research Group

ブルキナファソ農村地域における女性住民組織による マイクロファイナンス運営

神代ちひろ

はじめに

近年、アジア・アフリカ諸国では貧困削減を目的として、女性住民組織に対するマイクロファイナンス（以下、MF）⁽¹⁾の導入が進んでいる。MFは女性の経済的な自立やエンパワーメントに効果があると考えられている。

MFを実施する機関（以下、MFI）は、政府系機関、商業銀行、MF専門銀行、信用金庫、共同出資組合型の機関、NGO／NPOなどと、多様化が進んでいる。MFIは個人またはグループに対して融資をおこなうが、多くの場合は無担保でも返済率が高まるよう、グループに対して融資をおこなう集団連帯保証制をとる。このグループは、MF利用のために新たに作られる場合と、既存の住民組織が常時の活動に加えてMF利用を新たにはじめる場合に大別される。

これまでのMFの利用に関する研究は、多くの場合、ある特定のMFIをとりあげ、当該MFIを利用する女性および住民組織（グループ）の分析をおこなってきた[e.g. Anderman & Kropp 2006; Endeley 2001; Kevane 2002]。そのような分析対象の選定法に起因して、女性や既存の住民組織が複数のMFIの融資を組み合わせながらMFを活用する事例、さらには住民組織が自己資金でMFを運営するような事例はほとんど報告されてこなかった。MFI⁽²⁾の資金を利用し、女性たちが自らクレジット（信用貸付）の貸付や返済をおこなっている事例の研究では、アンケート調査などの二次資料を利用したものが多く、運営の実態はあきらかにされず、アウトリーチの分析に留まっている[e.g. Acharya 2009]。

これらの先行研究における問題点を踏まえ、本論文では、西アフリカ、ブルキナファソのある女性住民組織をとりあげ、当該組織におけるMFIの活用と、自己資金によりMFIの介入なしでMFを運営する実態についてあきらかにする。そのうえで、自己資金によりMFを運営することができる能力を「知識と技法」とみなし、どのようにそれが培われてきたのか、何がその維持を可能にしているのかを分析する。

調査地の概要

本論はブルキナファソ北西部、ムフン州デドゥグ県パラコ村（Province de Mohoun, Dédougou, Parako）において（図1）、2008年12月から2011年2月まで計7ヶ月間、断続的に現地に滞在しておこなった調査をもとにしている。パラ



図 1. 調査村の位置（筆者作成）

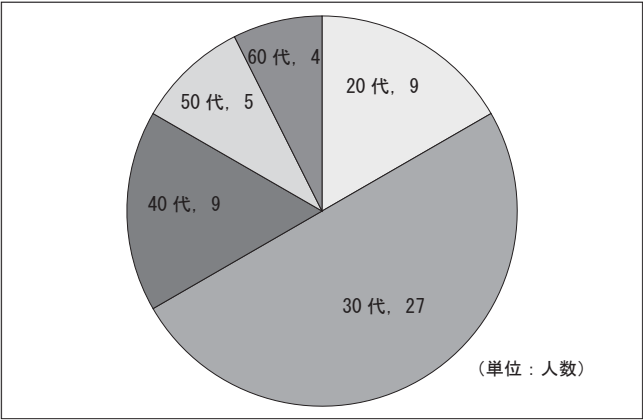


図 2. ハナーミ会員の年齢構成（2009 年）（筆者作成）

コ村には、ブワム語 (Buamu) を話すブワ (Bwa) の人びとが主に居住している。人口は 3,046 人 (2006 年時点) であり、主な生業は農業である。

調査村には 13 の女性住民組織が存在していた。これは、近隣 2 村 (ほぼ同じ人口規模) ではそれぞれ 2 つの女性住民組織が存在していたことと比較すると多い。調査対象とした女性住民組織ハナーミ (Hannami) は、1997 年に 3 人の女性により立ち上げられた。村のカトリック教会の礼拝においてドイツ系 NGO で働く村びとによって周知された、菜園用の金網設置や井戸作りの支援の存在を聞いたのことだった。彼女たちは、女性の現金稼得活動を支えるための菜園をつくることを目的としてハナーミを組織した。ハナーミとは、ブワム語で「なにかを創り出す」という意味である。活動の二本柱は、菜園の所有と MF の利用および運営であった。設立当初の会員数は 35 名であったが、2011 年には 54 名で活動していた。30 代の会員が約半数であり (図 2)、就学歴があるのは会員の 3 割、識字教育を受けた経験者は 4 割であった。平均年齢が 47.6 歳の幹部 11 名のうち、3 名に就学歴があり、書記と代表のみ公用語のフランス語を習得していた。

マイクロファイナンス機関の活用とハナーミによる交渉

ハナーミは、2004 年から MF の利用を開始した。これまで、政府系の女性報酬活動支援基金 (FAARF: Fonds D'Appui aux Activites Remuneratrices des Femme 以下、支援基金)、基金のバサコンゴ地域開発連帯基金 (FONSDEV: Fonds de Solidarité pour le Développement Zone de Passakongo 以下、連帯基金)、カトリック系 NGO のアシエナ (AsIEnA: Association Inter Instituts Ensemble et Avec) から融資を受けてきた (表 1)。

ハナーミはこれらの機関を同時に利用したり、うまく返済できるよう状況に応じて、さまざまな交渉をおこなってきた。

表 1. ハナーミが利用するマイクロファイナンス

MF1	形態	利用 開始年	利用 回数	原資に対する 利子 (%)	返済 期間 (月)	交渉内容 (ハナーミ からの申し入れ)	交渉の結果
支援基金	政府系	'04	3	10	12	利用開始時期延期	利用開始延期
連帯基金	基金	'07	2	4	6	返済期間を 4 ヶ月 から 1 年間に延長	6 ヶ月後まで 延長
アシエナ	NGO	'08	1	24	12	利子率の引き下げ	利子率に変更なし 返済方法を変更

MF1 = マイクロファイナンス機関

支援基金 = 女性報酬活動支援基金 (FAARF: Fonds D'Appui aux Activites Remuneratrices des Femmes)

連帯基金 = バサコンゴ地域開発連帯基金 (FONSDEV: Fonds de Solidarité pour le Développement Zone de Passakongo)

アシエナ (AsIEnA: Association Inter Instituts Ensemble et Avec)

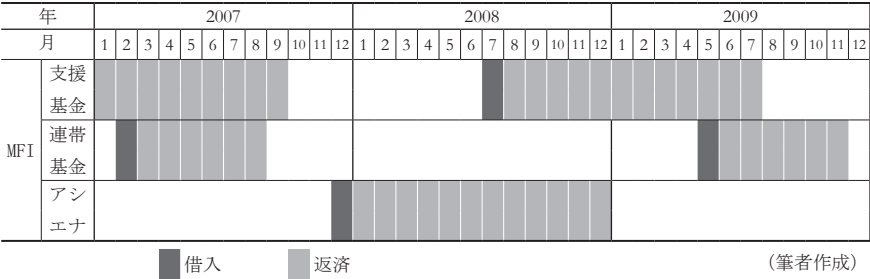
[事例 1：利用開始時期の延期] ハナーミが支援基金からの借り入れ手続きを始めたのは 2003 年であったが、ハナーミは当時別の NGO から支援を受けていた。MF 利用を新たに始めて活動が複雑になるのを回避するために、ハナーミの幹部が支援基金に開始時期を延期したい旨を申し入れ、その後 2004 年から利用を開始した。

[事例 2：返済期間の延長] 連帯基金から融資を受ける際に、通常は 4 ヶ月間でクレジットの返済をおこなうところを、ハナーミは 1 年間に延長するよう申し入れた。連帯基金側はその条件だと資金不足により運営に支障が生じるため、この申し入れを断ったが、最終的には 6 ヶ月間で返済をおこなうこと認めた。

[事例 3: 利子率の交渉] アシエナのクレジットの利子率は 24%（年利）であった。ハナーミは、この高い利子率に反発し、利子を下げをを申し入れた。普段ハナーミを担当しているアシエナの支部のスタッフには対応しきれず、首都⁽³⁾の本部スタッフが村まで出向き、ハナーミの会員と議論を重ねた。しかし交渉は決裂し、ハナーミは規定通り 24% の利子率で返済をおこなった。その一方で、ハナーミは自分たちがとり組みやすい方法で返済することを了承させた⁽⁴⁾。ハナーミの会員たちは、「アシエナのクレジット融資は利子が高すぎるため金輪際受けない」と口ぐちに語った。

このように、ハナーミは融資の条件を交渉しながら、2004 年からほとんど途切れることなく複数の MFI から融資を受けてきた。さらに 2007 年の同じ時期に支援基金と連帯基金の MFI から融資を受けた。それぞれの返済時期は、ほぼ重なっ

表 2. ハナーミのクレジット借入と返済期間（2007 ～ 2009 年）



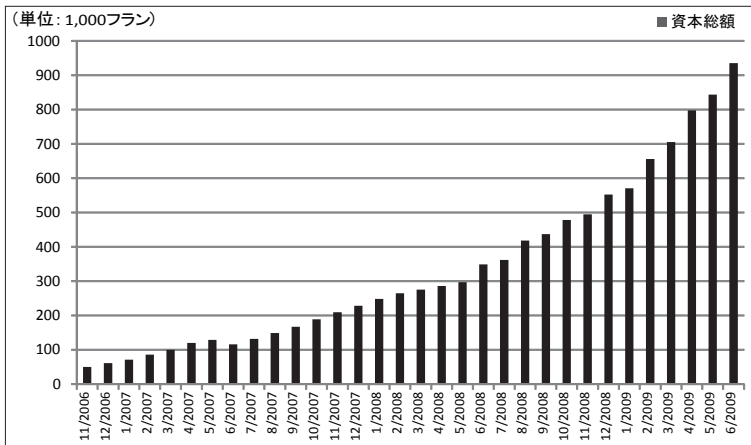
MFI＝マイクロファイナンス機関
支援基金＝女性報酬活動支援基金（FAARF: Fonds D’Appui aux Activites Remuneratrices des Femmes）
連帯基金＝バサコンゴ地域開発連帯基金（FONSDEV: Fonds de Solidarité pour le Développement Zone de Passakongo）
アシエナ（AsIEEnA: Association Inter Instituts Ensemble et Avec）

ていた。各 MFI に対して、期日に遅れず返済したことを評価され、2008 年にはアシエナと支援基金、2009 年には支援基金と連帯基金の返済期間が重なっていたにもかかわらず、それぞれの MFI から融資を受けることが認められた（表 2）。

マイクロファイナンスの自主運営

ハナーミは、上記のような MFI からの借り入れと並行して、自分たちの組織内でも、会費を運用して会員に対し資金を貸し付ける MF 活動をおこなっていた。2006 年に NGO アシエナのスタッフによってもちこまれた「健康のおかね（*lobe buie mari*）」という活動である。アシエナは、老後のために毎月貯蓄をさせることを目的に、主に女性住民組織を対象としてこの活動を普及させていた。ブルキナファソでは 200 以上の組織（2009 年時点）、パラコ村ではハナーミに加えて 2009 年から新たに 4 組織がこの活動をおこなっていた（2011 年時点）。

ハナーミの「健康のおかね」の活動の構成員は、ハナーミ会員以外の 18 名の村の女性を加えた、計 72 名であった。会員は、毎月 500CFA フラン（以下、フランと表記：約 100 円）^⑤ を会費として支払っていた。そのうちの 450 フラン（2009 年 3 月から 2010 年 6 月）^⑥ を貯蓄用とし、50 フランは緊急時^⑦ のための保険としていた。この貯蓄金が、クレジットとして運用されていた。原資はこの貯蓄金に加えて、クレジットの返済時の利子であり、2006 年から 2009 年まで増加し続けていた（図 3）。クレジットの返済期間は 2 ヶ月で、利子は原資に対して 10% である。集会は毎月第二月曜日に、全員参加が原則でおこなわれていた。集会でまずは会費が徴収され、次にクレジットの返済、最後にクレジットの貸し付けがおこなわれていた。



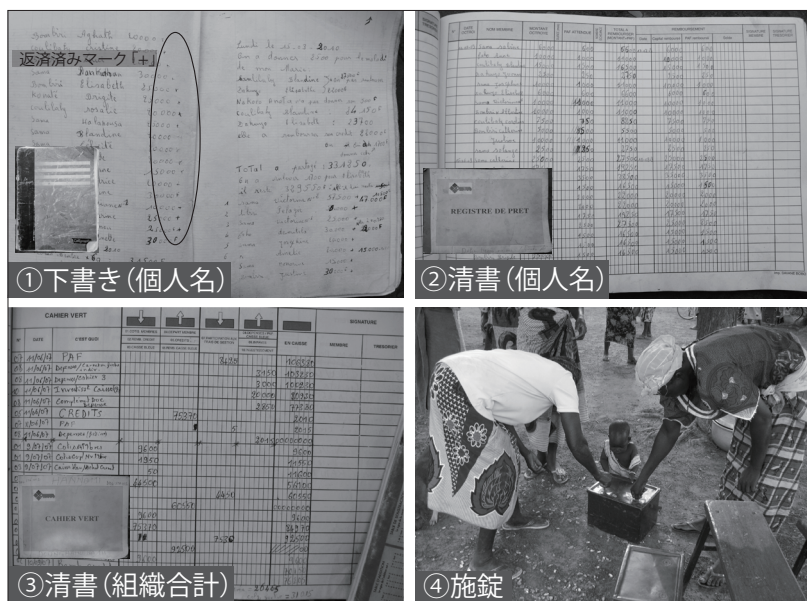


図4.「健康のおかね」返済手続き

返済の手順は次のとおりである。まず名前を呼ばれた会員が一人ずつ現金を返済する。書記は、現金を確認したうえで、下書き用ノートにある個人名のところに、返済が済んだことを示す十字印をつける（図4①）。次に清書用ノートに、各自の返済額、返済日を記入する（図4②）。その後、組織全体での返済額と利子の合計を計算し、別の清書用ノートに書く（図4③）。最後にそのノートを金庫にしまい、施錠する（図4④）。その金庫と2つの鍵は、3名が管理する。このように、返済は皆の監視のもと、不正がおこなわれないような仕組みであった。アシエナのスタッフは返済日には同席せず、別の日にノートに目を通してきちんと記帳されているかを確認するのみであった。

これに対し、村内で「健康のおかね」の活動をおこなう別の3組織では、アシエナのスタッフが集会をとり仕切り、記帳をしていた。彼らは、集会の最後にMFの意義を熱弁し、返済を促していた。

自己資金によるマイクロファイナンスの運営

ハナーミはアシエナの監督下でおこなっていた「健康のおかね」の活動を、2010年6月に終了した。それ以後、アシエナとともに活動を継続することはせずに、新たに自分たちだけで運営する「健康のおかね」の活動を開始していた。

これに加えてハナーミは、「白人から得た資金⁽⁸⁾」を元手にして2010年7月からグループモンワリ（groupement wari グループのおかね）というMFの自主運営も

表 3. 自主運営をおこなうマイクロファイナンス (MF)

MF 名	開始年月	資本の出所	原資に対する 利子 (%)	返済期間 (月)
新「健康のおかね」	2010 年 7 月	貯蓄金	10	2
グループモン・ワリ	2010 年 7 月	援助金	5	2
ハーロキュア・ワリ	2009 年 7 月	自転車貸出料	10	2

(筆者作成)

開始した。さらにハナーミは 2009 年 7 月からは自転車貸出料を元手にしたハーロキュアワリ (*baaro-cua wari* 自転車のおかね) という MF も開始していた (表 3)。ハナーミは、これらの MF の貸付・返済をすべて同じ日におこない、NGO や MFI の介入や監視なしに、自分たちで管理していた。

これにより、返済をめぐる組織内で意見が激しく交わされる状況も生じた。例えば利子分の現金 (250 フラン) を持参しなかった者に対して、半ば口論のような形で会員同士が意見をかわし、最終的には、この話し合いによりその人は利子も含めてその日のうちに返済することになった (2010 年 1 月 10 日事例)。

会員のマイクロファイナンス利用

会員は、ハナーミを介して複数の MFI から借り入れた MF を組み合わせて利用している。MF 利用と、返済時の家計状況について、以下に事例をあげる。

SC さん (61 歳) は、ハナーミの代表を務めており、ハナーミの立ち上げに関わった一人である。子供は 11 人いるが、同居していたのは末娘、孫娘 (四女の娘)、孫息子 2 人 (次男の息子) の計 4 人であった。夫は 2002 年に事故で他界した。次男は、モロコシやトウジンビエを生活費のかわりに SC さんに提供していた。SC さんは、孫に服などを買ひ与え、MF を利用して孫 3 人の学費も支払っていた。2004 年から 2009 年にいたるまで、SC さんはハナーミが融資を受けてきた MFI からほぼすべての機会を通してクレジットの融資を受けてきた。2007 年からは、MFI からの融資を受けることにくわえて「健康のおかね」の資金も頻繁に利用してきた (表 4)。さらに SC さんは新「健康のおかね」やグループモンワリの利用も始めていた⁹⁾。

参与観察と聞き取りをもとに、SC さんの雨季 1 ヶ月 (2009 年 7 月 22 日から 8 月 22 日) の収支を概算したところ、地酒作り、野菜販売、小商いなど多様な現金稼得活動から収入を得ていることがあきらかになった。1 ヶ月の収入は 130,125 フランであり、これに対して支出は 26,375 フランであった (表 5)。SC さんの場合、収入が支出を上まわっており、クレジットの返済をおこなっても、1 ヶ月間は所持金が常に黒字のままで生活ができていた (図 5)。

表 4. SC さんのクレジット借入と返済期間（2007～2009 年）

年 月		2007												2008												2009											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
MFI	支援 基金																																				
	連帯 基金	■																								■											
	アシ エナ	■												■																							
	健康の おかね	■												■												■											
		■												■												■											

借入
 返済

(帳簿と聞き取りにより筆者作成)

MFI = マイクロファイナンス機関

支援基金=女性報酬活動支援基金 (FAARF: Fonds D'Appui aux Activites Remuneratrices des Femmes)

連帯基金＝パサコンゴ地域開発連帯基金 (FONSDEV: Fonds de Solidarité pour le Développement Zone de Passakongo)

アシエナ (AsIEnA: Association Inter Instituts Ensemble et Avec)

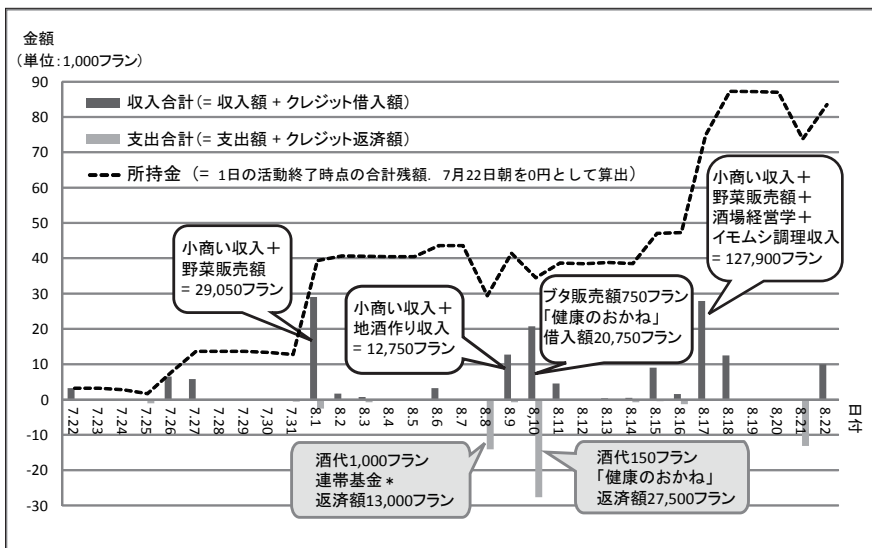


図 5. SC さんの雨季 1 ヶ月の支出入と所持金

(2009年7月22日～2009年8月22日調査より筆者作成)

*連帯基金＝パサコンゴ地域開発連帯基金

(FONSDEV: Fonds de Solidarité pour le Développement Zone de Passakongo)

表 5. 1 ヶ月の支出入《SC さん（61 歳）の場合》
(2009 年 7 月 22 日～8 月 22 日)

収入項目	収入額	支出項目	支出額
地酒作り	35,500	食費	19,875
野菜販売（バラコ村）	3,676	酒代	5,650
トウガラシ	2,025	衣服代	350
小商い	71,225	雑費	500
ブタ販売	10,750	合計	26,375
ブタのエサ販売	100	(筆者作成)	
イモムシ調理	5,650		
酒場経営	1,500		
合計	130,125		

単位：フラン

おわりに

これまで、ハナーミおよびその会員が、複数の MF を同時期に組み合わせて MF を利用してきた実態をあきらかにした。ハナーミは、繰り返し融資を受ける過程で、組織内での会費や返済金の集め方、貸付・記帳の仕方を習得し、MF を自主運営するための知識や技法を組織として身につけてきたといえる。それを可能にしている背景として、以下の 3 点を指摘できる。

まず、ハナーミが自律性の高い組織であることである。ハナーミは、MFI に対して交渉をおこなうことで、自分たちがより利用しやすい融資の条件を整えてきた。アシエナのスタッフは、ハナーミがとった返済法について、自分たちが経験を重ねてきた連帯基金の返済法を活用したのだろうと述べていた。これに加えて、返済できない者がいたときに、他組織では NGO スタッフが介入したが、ハナーミでは会員同士で返済を促していた。これらのことから、ハナーミが MF 利用に関して自律的な行動を起こせる組織であることが示唆される。

次に、MF を運営する技術が定着していることが指摘できる。村内に限らず、ブルキナファソの多くの地域で、MFI スタッフが各組織の返済の記帳をおこなっている [Kevane 2002]。しかしハナーミの場合は、組織内にきちんと記録ができる書記が存在する。また、2008 年では書記補佐だった会員が、2011 年には主要な書記としての役割を担っており、組織内で記帳をはじめとした MF 運営の技術が継承されていると考えられる。

最後に、個々の会員が借入金と利子を返済できていたことである。これまでハナーミが複数の MF を継続的に利用することができたのは、組織として期日に遅れず返済し続けたことにより、MFI の信用を得てきたからである。このことは、SC さんの事例にみられたように、個々人の返済能力の高さに支えられているといえるだろう。

以上のようにブルキナファソ農村の女性住民組織ハナーミでは、数々の MF を利用する経験や、NGO が導入した方法で MF を運営する経験を得たことにより、組織内で MF を運営する知識や技法が培われてきた。そして、数年のうちに自己資金によって MF を運営する能力までもが組織内に醸成されていた。

注

- (1) 貧困層や低所得者層を対象とした小規模金融が従来マイクロクレジットと呼ばれてきたが、近年ではそれに貯蓄の機能も含め、マイクロファイナンスと呼ばれるようになってきた。
- (2) Oxfam America など。
- (3) 村と首都の距離は約 200 km。
- (4) 本来なら、借りた額に利子を加算し、それを 12 で割った額を毎月支払うよう決められていた。しかしハナーミは、毎月借りた額の 10% のみを払い、最後の 2 ヶ月で利子を返済する方法をとった。
- (5) ブルキナファソで使用されている通貨、CFA フラン（セーファー・フラン：Franc de la Communauté Financière Africaine）。1 ユーロ ≒ 656 フラン。1 フラン = 0.17590 円、1 円 = 5.68513 フラン（2011 年 2 月 16 日時点）。
<http://www.interq.or.jp/world/naoto/benricho/exchange.html>（2011 年 3 月 10 日参照）。
- (6) 2006 年 11 月から 2009 年 2 月までは毎月 150 フランを貯蓄していた。
- (7) 病気、葬式など。会員だけでなく、ハナーミの運営を支える者やメンバーの親族にも支給されていた。
- (8) 組織名については未確認（代表や幹部への聞き取りからはあきらかにならなかった）。
- (9) これらに加えて SCさんは、ハナーミとは関係がない Agence de Boromo という MFI のクレジットも個人的に利用していた。

参考文献

- Anderman, E. & S. Kropp 2006. *Microfinance in Burkina Faso: An Evaluation of the Credit with Education program for Women*. Master thesis, Växjö University.
- Acharya, M. 2009. *Reaching the poorest through microfinance: Learning from Savings for Change Program in Mali*. Doctoral thesis, Graduate School of the University of Massachusetts Amherst.
- Endeley, B.J. 2002. Credit options, human resource development and the sustainability of women's projects: Case study of the 'association of creative teaching—women in development projects' in the south-west province, Cameroon. In (B. Lemire, R. Person & G. Campbel, eds.) *Women and Credit: Researching the Past, Refiguring the Future*. pp. 181–202. Berg, Oxford.
- Kevane, M. 2002. Improving design and performance of group lending: suggestions from Burkina Faso. *World Development*, 30(11): 2017–2032.